松崎　渓作
九州大学大学院 生物資源環境科学府 修士１年

X 人寄れば文殊の知恵

今回の国際協力ワークショップを通じて私が最も強く実感したのは、人と人との「対話」が秘める無限の創造性と、人と人との偶然の出会いがもたらす予測不可能な奇跡の面白さである。

本ワークショップでは、恥ずかしながら今まで存在すら知らなかった国連ハビタットの役割やこれまでの取り組み、それから国際協力活動の現状について、座学の講義にて一から学ぶ機会を頂いた。また、津屋崎の日本家屋で行われた２日間の「対話」研修では、それぞれの考えや思いの丈を何時間も掛けてじっくりと伝え、語り合う「対話」というプロセスを通じて、国際協力や国際協力リーダーの在り方について一人では到底辿り着かなかったであろう多くの気付きを得ることが出来た。私なりの解釈では、「国際協力リーダー」とは、まさにこの津屋崎での研修で練習を重ねた「対話」を世界の舞台で実践し、世界規模で様々な人と協力しながら問題解決を図ることが出来るような人材であると思う。

このように、インプットとアウトプット両方を通じて「対話」を軸とした国際協力の在り方について学んだ後、２つの班に分かれてフィリピンの抱える課題に対する解決策を考案し、英語によるプレゼン発表を行った。私たちの班では班員６名が各自持ち寄ったアイデアを融合させ、「フィリピンのイロイロ市をターゲット都市として、ゴミの収集・分別を集中的に行うゴミステーションを各集落に建設し、ゴミ分別を確固たる習慣として根付かせ、ゴミから作ったリサイクル製品の販売等を行うことで環境的にも経済的にも持続可能な仕組みを築く」という趣旨のプランにまとめた。細かい点ではまだまだ検討すべき事項が残る発表内容ではあったが、このプレゼン発表を作り上げる過程で膨大な量の調べ物や侃々諤々の議論、その他諸々の試行錯誤を経験し、これは先述の「対話」を実践すると共に、英語での情報収集力や発信力を鍛えるのに良い機会となったと思う。また、グループメンバーの誰か一人でも欠けたらこのプレゼンは出来上がらなかったと考えると、途轍もない奇跡を感じずにはいられない。

偶然にも今回のワークショップに集まった十数人による「対話」でこのような奇跡を起こすことが出来るならば、もし地球規模で 79 億人が一斉に「対話」したら一体どれほどの奇跡が起きるのだろうか？そう考えると、世界の舞台で様々な背景を持った人々と語らい、一緒に仕事をする日が待ち遠しくてたまらない。

田野中　美波
西南学院大学　文学部英文学科　3 年

新しい学びと出会いの 6 日間

私は大学 3 年生の春休みに「福岡県国際協力リーダー育成プログラム」に参加しました。プログラムでは今までになかった学びと出会いがありました。

プログラムにはフィリピンにおける課題の解決策の作成と発表が含まれていました。私が解決プランを作る上で最も苦労したのは想像力を働かせることです。解決策を作るにあたり「提案をする側」と「提案をされる側」の意識の差を理解し、「される側」の思いを想像することが求められました。現地の課題解決のために相手が必要としているものは何か、あるいは、どのようなことが相手にとって迷惑なのかを常に考えていました。私たちはただひたすらインターネットで情報を調べ、想像し、意見交換をすることで解決プランを作っていきました。私たちがこの期間で考え抜いたプランは完全ではありませんが、「相手の思いを想像する」という経験は、今後国際協力を含む様々な活動をする上で役立つと確信しています。

そして、福津市津屋崎にある玉乃井で行われたワークショップで「対話」について考えたことは私に多くの気づきをもたらしました。例えば、大学のディスカッションなどで発言する時に私はいかに、もっともらしいことを言えるか、ということに集中していました。それが原因で自分の意見を伝えることをおろそかにしてしまっていました。私がそのことに気がついたのはワークショップ内で対話を実践したときです。対話が行われる空間では皆が相手の意見に対して寛容になるので、下手な言葉でも自分の思いを伝えたいという気持ちになります。私は対話を実践して、対話はそれぞれの本当の思いや考えを引き出し、よりお互いへの理解を深めることができるツールだと感じました。また、相手を打ち負かすのではなく、意見を受け入れることで課題解決の答えに近づくことができるのだと知ることができました。

プログラムでは様々な人との出会いも刺激的でした。プログラムに参加したメンバーは皆熱心で、そのおかげで積極的に活動しやすい環境が生まれました。その環境の中で全員が必死にプログラムに取り組んだことで、たったの 6 日間しか一緒に過ごしていませんが、私は皆さんのことが大好きになり、かけがえのない出会いとなりました。また、プログラムにてご指導やご尽力いただいた方々の経験や考え方から大変多くのことを吸収することができました。様々な方との交流を通して得たものは間違いなく私の価値観に影響を与えました。福岡県国際交流センター、国連ハビタット福岡本部の方々をはじめ、ご指導いただいた皆様に心よりお礼申し上げます。

古川朋佳
福岡大学　法学部　３年

キャリアの分岐点となる学びを得た６日間

大学一年次に、シアトルの語学研修に参加した経験から、海外に興味を持ち始めました。二年次には、フィリピンにインターンシップ研修とニュージーランドの語学研修に参加して国際協力について学ぶ予定でしたが、新型コロナウイルスの影響により派遣研修が中止になり、大学生活において海外との接点が遠いことに悩んでいました。コロナ禍でも、海外と交流ができないかと模索している中で、本プログラムに辿り着きました。本プログラムは、国際協力に関心があり、将来、国際協力に携わるような仕事をしたいと考える青年が審査を経て、参加する研修プログラムです。今回は、大学や学部、国籍などバックグラウンドが違う 11 人の学生が 2 チームに分かれて発展途上国の課題の解決策を国連ハビタットに提示しました。今回のプログラムを通して、私が得た学びは主に２つあります。

１つ目はイノベーションにおいての対話の重要性です。津屋崎の研修で、相手を否定しないという原則の下でお題に対して結論を求めない会議をしました。日常生活で結論が出ない会議した経験がなかった為、とても新鮮でした。相手を否定しない事で自由な意見が飛び交うので、通常の討論チックな会議では辿り着かない結論が出ていて面白かったです。相手を否定せず尊重することで新しい面白い発想がうみだせるという学びを得ました。

２つ目は支援する際に相手の立場に立つことの重要性です。今まで国際協力について話す際に「支援する」という言葉を何気なく使っていました。しかし、講義を通して「支援する」という言葉には少し傲慢さがあることを気づきました。自身が無意識のうちに発展途上国の人達は困っているというバイアスを持っていることを知り、なぜ国際協力をしたいのかを深く考えるきっかけになりました。また国際協力をする際に、発展途上国と定義される国が必ずしも支援を必要としているわけではないことを認識する必要性を感じました。本プログラムに参加したことで、発展途上国への知見が広がるとともに同じ目標を持った学生と知り合うことができ、良い刺激になりました。就職活動と並行して本プログラムに参加したこともあり、将来どんな大人になりたいのかを悩んでいた私にとって、本プログラムに携わっている方達は、情熱を持って仕事に取り組んでいて大変魅力的でした。私も将来的には、国際協力分野で活躍できる人材になれるように精進していきたいと思います。このプログラムを通して学べたことは、私の大学生活の大きな財産です。このような素敵な機会を設けて下さった福岡県国際交流センター、国連ハビタット福岡本部の方々をはじめ、ご指導いただいた皆様に心よりお礼申し上げます。

野上　愛美
福岡女学院大学国際キャリア学部国際英語学科２年

国際協力リーダーになるために

今回福岡県国際協力リーダー育成プログラムに参加し、世界で起きている深刻な問題や People's Process について、対話をすること、国際リーダーになるために必要なこと、国際機関で働くには、など様々なことについて深く勉強することができました。これらを通し主に３つのことを学びました。

一つは、国際協力を実際にすることの難しさを知りました。私が考えていた、思っていた国際協力と実際に国際機関で働いている職員の方のお話で知った国際協力に大きなギャップがありました。世界でいろんな問題に直面している人々に「自分たちのやり方」で支援をしてあげることで、国際協力をする人として一つの問題に貢献できると考えていました。しかし国際協力をする際、支援をする側がやりたいように支援をしてあげるのでは、それは国際協力として完璧な形であるとは言えないということを学びました。People's Process で学んだように、国際協力は「現地の人・住民が主体」となって問題について考え話し合い、実行していくことなのだということを知ることができました。また国際協力はそのサポートとして専門的知識を補う役割であるべきだということを学びました。

二つ目に、「知る」「伝える」ことの大切さを学びました。国際協力をするうえで一番大切なことは相手の主張やその国のバックグラウンドを「知る」なのではないかと感じました。コロナ禍で現地に行くことができない分、想像力を働かせてその国についていろんな情報やデータ収集し、考えることも非常に大切だということをグループでの活動を通して十分に感じることができましたが、やはり実際の現状を自分の目で見て感じ、考えていきたいと強く思いました。また現地に足を運んで実際に見ないと分からない部分もあると思うので、相手の国の現状や現地の人々の主張も含め「知る」という過程がとても大事だということが分かりました。「伝える」ということに関しては、自分の意見や考え方を相手に伝えることも重要ですが、改めて伝えることの難しさと大切さを考えることができました。津屋崎での二日間の研修でも学んだように、"討論"ではなく"対話"をすることの重要性に繋がっていると思いますが、自分の意見を言う際に、相手の意見を否定せず受け入れ自分の考えを伝えることは難しいと感じましたが、国際協力をする際にはとても大切な事柄の一つだと思いました。

三つ目は、貪欲に行動するということです。今回のプログラムを通し国際協力に興味を持っている人、世界の問題に他人事ではなくしっかりと向き合っている人、同じ分野に興味を持っている人、国際協力のプロフェッショナルの人、現地の最前線で働いている人など様々な方と出会うことができ、たくさんの刺激をもらうことができました。参加した皆

さんと協力し、今起きている問題に真剣に向き合い、どのように解決すべきなのかを一生懸命考え、それを形にできたことにすごく達成感を感じることができました。参加していた方々の国際協力に対する熱意や思いに私自身も、もっといろんなことに興味を持ち、挑戦することで国際協力リーダーに一歩近づくことができるのではないかと実感しました。今回のプログラムを通し、国際協力リーダーになるためにはまだまだ勉強と努力と知識が必要だということと、そのためにいろんなことに挑戦していこうという国際協力に対する自分の気持ちを高めることができました。

タパ・プラミラ
福岡女学院大学 国際キャリア学部 国際キャリア学科 2 年

国際協力ワークショップの感想

私は、令和 4 年 2 月 16 日から 3 月 7 日までの間、福岡県国際交流センターと国連ハビタットが実施している、令和 3 年度福岡県国際協力リーダー育成プログラム「国際協力ワークショップ」に参加し、国際協力や対話についての勉強やグループワークを行った。このレポートでは、私が学んだことのうち、特に印象に残っている 2 つのことを書きたいと思う。

まず、一つ目は対話だ。対話とは、討論とは違い、たとえ考えや立場が違っても、お互いの考えを受け入れ、協力して解決策を考えることである。私はこのワークショップに参加するまでこのことを知らず、今回初めて学んだ。また、対話をすることで、相手を知ることができ、相手の立場に立って物事を考えることができるようになるということからも、私は対話に魅力を感じた。そして、討論の場合は、相手の主張を認めることはほぼないため、お互いのアイデアを繋げるということはないが、対話はお互い寄り添うので、世界中の人々と協力したり、社会課題を解決したりするために必要であるということに気付いた。私は、これからは討論ではなく、どのようなことがあっても対話的な考え方で行動していきたいと思う。

次に、フィリピンの社会課題について調べたことだ。私たちは、二つのグループに分かれて社会課題やその課題に関する解決策を調べ、これからその課題を解決するためには何が一番必要なのか、どうすればよいのかを考えた。私のグループでは、北ミンダナオ島を中心に社会課題を調べたところ、教育を受けていない子供たちや貧困問題で苦しんでいる現地の人々が多いということが分かり、3 つの解決方法を提案することにした。一番印象的だった解決策は私たちが国際協力リーダーとして、現地の機関と協力して、人々にお金を融資するマイクロファイナンスを始めることである。教育を受けることができる子どもたちを少しでも増やすためには、その問題の根底にある貧困を解決しなければならないからだ。これは難しくも見えるが、多くの人々が協力すれば、きっと実現できるということに気づいたときの嬉しさが私は忘れられない。

この国際協力ワークショップに参加するまでは、留学生が自分一人だったということもあり、とても不安だった。しかし、メンバーの皆や職員の方々に親切にしていただいたおかげで、本当に充実した時間を過ごすことができたと思っている。そして、対話や people’s process、グループワーク、フィリピンの 社会課題の解決策についての英語のプレゼンをしたことで、様々な知識を身に着け、子供の頃からの私の夢である「国際協力リーダー」として活動するために必要な勉強ができ

た。このような機会を作ってくださった、福岡県国際協力センターの方々や国連ハビタットの方々に本当に感謝している。

大河内　美夢
福岡女学院大学　国際キャリア学部　２年

国際協力リーダー育成プログラム
「国際協力ワークショップ」に参加して

まず、私がこのプログラムに参加したきっかけは、大学からのお知らせです。このお知らせを拝見した際、以前から少しでも発展途上国を暮らしやすい国、町にしたいと思っていた私は応募することを決めました。特に、私が気になっている国際問題は、発展途上国では小さな子供たちが奴隷のように学校にも行けず、昼夜労働しているという現状です。それら問題をもっと詳しく知り、世界を少しでも良い方向に変えるお手伝いが出来ればと思い、参加を決意しました。

次に、このプログラムの中では、JICA や国連ハビタットの職員の方、また津屋崎での研修では山口さんなど多くの方々から発展途上国での実際に起こっている問題や現状、さらには「対話とは何か。」、「People’s process」など多くのお話を聞くことが出来ました。その中でも私は国連ハビタットが大切にしている「People’s process」が大変心に残りました。例えば、被災にあった国に家を立てるという支援活動をする際も、住民の方にまずはどうしたいか意見を聞き、それを取り入れる、また住民の方々が自身で自分の家を立てるということです。私は、この「People’s process」のお話を聞いて、こちら側が手助けと思ってやっていることも、相手側はもしかすると嫌な思いをしているかもしれないから、しっかり現地の人々とコミュニケーションをとり、納得した形で協力するからこそ素晴らしい活動になるのだなと思いました。この「People’s process」は国際協力だけに関わらず、社会で生きていく際にもとても必要であり、とても活用することができると思います。
また、最終プレゼンをするにあたって、グループメンバー６名で意見を出し合いました。その際、１人では確実に分かりきることのできなかったフィリピンでの多くの環境問題やチームでの団結力の大切さなどを学ぶことができました。

最後に、このプログラムを通して、私はテレビなどメディアで報道されている以上に厳しい現状があることや国連ハビタットの行う復興支援のやり方など多くのことを学ぶことができました。また、国際問題や環境問題を学べたことはもちろんのこと、同じ志を持つ仲間と出会えたことにとても嬉しく、このプログラムを開催してくださった福岡県国際交流センターの皆様や国連ハビタットを始めとする関係者の皆様に感謝申し上げます。６日間という短い期間ではありましたが、大変有意義な時間をありがとうございました。

中村萌香
福岡女学院大学 国際キャリア学部 国際キャリア学科 １年

国際協力リーダー育成プログラムで得たこと

最初、国際協力リーダー育成プログラムに参加しようと思ったきっかけは大学の授業で学んだ貧困問題に興味を持ったからだ。授業の中でエチオピアではゴミの問題が非常に深刻でゴミ拾いをするために学校にいけない子ども達がいるという現実に衝撃を受けた。世界には私が知らないような数多くの問題が存在している。私ができることは世界で起きている問題について自分自身で考え、学びを深めることだと感じた。国際協力リーダー育成プログラムは６日間という非常に短い期間だったが成長できたと感じた。このプログラムで私は２つのことを学ぶことができた。

１つめは国際協力リーダーについてだ。国際協力を行う際に必要なスキルとは何か、理想とするリーダー像は何かについて他者と意見交換をした。国際協力を行うことは非常に責任が伴うことなので周りの人とのコミュニケーションを取ることが重要である。また、コミュニケーションをとる際には気をつけることがある。それは相手の意見が自分と違う意見であっても否定をしないことや１人１人を尊重することだ。今後、コミュニケーションをとる際も気を付きたいと思った。

２つめは貧困問題をはじめとした世界の問題についてだ。実際にフィリピンで問題となっている事例や国連ハビタットで行っている取り組みについて知った。特に私が興味を持ったことは国連ハビタットが行っている「People’s Process」だ。この取り組みでは復興を行政だけに任せるのではなく、現地の住民全員の話し合いによって行う。現地の住民を中心に置いた復興のやり方である。行政だけにまちづくりを任せると現地の人々が納得するようなまちづくりが実現しにくい。そこで、現地の方の意見を積極的に受け入れることに今よりも住みやすい環境を作ることが期待できる。また、場所によっては男性だけが発言権を持っていて女性の意見が通らないこともある。その場合は女性だけで集まってもらい意見を出し合える環境を作ることをしている。住民自身が直接かかわることで費用が安く抑えられることはもちろん、コミュニティーでの連帯感も生まれることを知った。開発途上国では様々な課題が複雑に絡み合って存在しており解決が難しいが、人々が協力して解決するための努力をしていかなければならないと感じた。

このプログラムを通して他人に自分の意見を伝え、行動を起こすことは非常に大切だと知った。また、このプログラムに参加する前よりも世界の問題が身近な問題なのだと捉えることもできた。今後は世界の問題についての学びを深め、良い国際協力リーダーになれるように努力したい。

桃井歩美
福岡女学院大学　国際キャリア学部　国際キャリア学科　１年

国際協力リーダー育成プログラム感想

この 6 日間の研修は私にとってとても大切な経験でした。初日は簡単な自己紹介や、国連ハビタット福岡本部本部長補佐官星野幸代氏による国連ハビタットと国際課題についての講演や JICA 職員の井村皓一氏によるプログラム参加時の経験談、九州国際大学准教授の藤井大輔氏による国際協力とは何かを学ぶ講演を受けました。参加者 11 人中、1 年生は私を含め、2 人だったため、はじめはとても緊張していましたが、ある先輩がお昼休みにみんなで改めてラフに自己紹介をしようと提案してくださり、初日からとても良い雰囲気で研修をスタートすることができました。

2、3 日目は津屋崎の古民家で国際協力リーダーのあり方について考えました。私はそこでリーダーとは周囲の人を理解しようとするだけでなく、自分自身も深く理解すべき存在であることに気づきました。津屋崎でお昼ご飯を何人かに分かれて食べに行った際には、先輩方とこれまで以上にいろいろな話をすることができたため、とても勉強になり、楽しかったです。

4 日目は藤井氏による SDG s に関する講演やラリス・ランカティレケ氏による people's process とは何かを学ぶ講演、国連ハビタットミャンマー事務所の藤平純氏によるフィリピンでの実際の国際協力プログラムに関する講演を受けました。この日は特に英語で学び、発信する機会が多かったため、英語が得意でない私にとってとても刺激的でした。同じ講演を英語が得意な参加者の皆さんと共に受けて、自分が理解できない部分も他の参加者の皆さんは学び取っていることを痛感し、悔しい気持ちもありました。この感情を得られたことも一つの財産だと思います。自分の学びの世界を広げるためにも絶対に英語を使いこなせるようになりたいと感じることができました。

5 日目は実際に自分たちでフィリピンの課題解決に向けての取組を考えました。私たちのチームはフィリピンのゴミ問題解決に向けて考えを結集させました。チームの一人ひとりが良い個性や考えを持っていて、プレゼンテーションづくりにチームのカラーを落とし込むことができたのではないかと思います。そして最終日は考えた取組を英語でプレゼンテーションしました。この日を迎えるまでに、研修日以外でも zoom ミーティングや連絡を取り合って、チームみんなで一生懸命準備してきました。就活など先輩方は研修以外にもきっと忙しかったと思いますが、最後の最後まで、前向きに取り組んでくださったことにとても感謝しています。本番もチームで納得のいくプレゼンテーションができたことに感動しました。実際に一から課題解決方法を考えてみて、こんなちっぽけな私でも国際協力に対する自分の可能性を感じることができました。フィリピンの課題に向き合ってみて、フィリピン人の方々と心でつながるには、やはり現地に足を運びたいと感じました。この研修が始まる

前まではこのような感情は起きなかったため、自分の考えがこの研修を通してより深いものに変化していることを実感できました。参加者全員仲が良く、好奇心の塊のような先輩方と交流できたため、とても勉強になり、たくさんの刺激をいただけました。本当にこの研修に参加してよかったです。この研修の運営に携わってくださったすべての人に感謝します。

鈴木結芽
西南学院大学 外国語学部 外国語学科 2年

よりよい国際協力を求めて

私は、今回の福岡県国際協力リーダー育成プログラム「国際協力ワークショップ」に参加し、福岡県国際交流センターでの講座、津屋崎での研修、課題解決プラン発表のためのグループワークなどを通して、様々なことを学ぶことができた。その中でも、特に私にとって印象的だった2つの事柄について述べたいと思う。

まず、1つ目は、相手をリスペクトすることの重要性だ。これは、簡単なことに思われるかもしれないが、意外と難しい。なぜなら、多くの人は「自分は正しい」と無意識に思い込んでしまっていることがあるからだ。私たちは今回のワークショップで、「対話」と「People's Process」について学んだ。「対話」は絶対に否定や断定をせず、他者とアイデアを繋げることで答えを探す話し合いの仕方、「People's Process」は支援対象の現地の方々と協力してプロジェクトを進めていく方法である。これら2つに共通していると私が感じたことが相手をリスペクトすることであった。相手をリスペクトせず、自分もしくは自分たちの考えだけでプロジェクトを推し進めても、それは実際、相手のためになっていないかもしれない。相手をリスペクトすることこそがよりよい国際協力を行う鍵になるのではないか、と私は考えた。

2つ目が、エンパワーメントの重要性だ。私たちはこのワークショップでエンパワーメントの必要性も学んだ。エンパワーメントとは、自分たちで問題について発言し、解決策を考える力を身に着けたり、社会的地位や影響力を強化したりすること、つまり生きる力を身に着けることだ。ある問題が一時的なものではないとき、それは物資を提供するだけでは、永遠に解決されない場合がある。なぜなら、根源にある問題が解決されていないからだ。私は今まで、国際協力に関心を持ち続けてきたが、エンパワーメントについては今回初めて学んだ。将来、国際協力に携わる仕事に就くことができたとき、必ずこの「エンパワーメント」を意識して、国際協力をしたいと心から思う。

私は、今回のワークショップで、現地の問題について知ることはもちろん大事だが、相手をリスペクトすること、何が問題の根源にあるのか考えることなど、忘れてはならない大事なことが他にも多くあるのだということを学ぶことができた。将来、私は国際協力に携わりたいと思っている。「自分が知っているのは物事のほんの一部だ」ということ常に意識し、これからも積極的に特定の分野に偏ることなく、様々なことを学び続けていきたいと思う。それがよりよい国際協力へ繋がるはずだと私は信じている。

渋田歩乃果
九州大学共創学部２年

国際協力リーダー育成プログラムに参加して

まず、私が国際協力リーダー育成プログラムに参加した理由は、元々国際協力に興味があり、将来も国際協力に関する仕事に携わりたいと思っていたからだ。また、本プログラムでは、国連職員の方とも交流できるということで参加を決めた。

本プログラムで一番印象的だったのは、津屋崎での研修だ。津屋崎での研修では、山口さんから「対話」の大切さを学んだ。また、ワールドカフェという対話形式を初めて経験した。ワールドカフェは、グループで話し合った後に、グループを一度シャッフルし、再度元のグループで話しあうという対話形式だ。一度メンバーを変えることで、様々な人の意見や自分たちのグループでは気づかなかったことを聞くことができて面白かった。最初、「対話」をすることがどのように国際協力と関連するか分からなかったが、おそらく国際協力をする上で、「対話」をすることで、見ただけでは分からない問題や人々の悩みに気づけ、適切な対処法を考える際に役に立つのだと思う。「対話」自体楽しいので、今後も色々な人との「対話」を通じ、他人の異なる意見や視点を知り、受け入れていきたい。

また、現在国連ハビタット職員の星野さんや、元国連ハビタット職員であるラリスさんからもお話を伺うことができた。国連ハビタットが掲げている、People's process　について今まで知らなかったが、知ることができた。想像以上に国連ハビタットは現地の人ベースで事業を進めていることを知り、いいと思った。People's process の考え方をきちんと覚えておこうと思う。

本プログラムは他にもキャリアを考える上でためになる国連職員や JICA の方のお話を聞いたりするだけでなく、グループで発表を行う等、他の大学の人たちともたくさん交流できた。例年みたいに実際に海外に行くことはできなかったが、色々なことを楽しく学べたプログラムだったと思う。将来、途上国支援や国際協力に携わりたい気持ちは変わらないが、データだけでなく、現地の人との「対話」を通じ、ハビタットが掲げる People's process のように携わる際には現地の人のことを考え、支援をしていきたい。